

Newsletter

No. 16 December 2014

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

着任のご挨拶

LACRCニュースレター16号の巻頭言にあたり、着任の御挨拶をさせていただきます。

この度、2014年9月25日に東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点特任教授として着任致しました。1983年弘前大学を卒業、東京医科歯科大学第一外科に入局。都立広尾病院、都立墨東病院、土浦協同病院、取手協同病院、友愛記念病院等で研修を受け、その後大腸班の一員として直腸癌に対する自律神経温存手術術式の適応と成績を中心に大腸外科・大腸内視鏡検査を研鑽。1994年に病理学の中村恭一教授や、癌研に勤務しておられた高橋孝先生の勧めと、第一外科遠藤光夫教授の御快諾を頂き、サンティアゴ市内にある国立サンボルハ病院・日智消化器病研究所にJICA専門家として赴任。当時のチリは軍事政権から民政移管され4年目で、海外に逃れ戻って来た医師達の話聞き、複雑な政治事情に戸惑いながらの1年間でした。



1998年4月から約13年間獨協医科大学第一外科に勤務、大腸外科・大腸内視鏡検査を担当。2011年7月からは友愛記念病院に勤務しておりました。

今回のチリ派遣は、大山前学長、吉澤現学長、江石教授、河野教授の御勧めと、友愛記念病院・加藤院長の承諾によって実現したものです。拠点であるClínica Las Condes病院(CLC)は、Robotic Surgeryの設備も整っており先進医療が可能で、内視鏡検査を指導・実践するサン・ボルハ病院は旧知の外科医達との交流もでき、私には有難い環境であります。

現在PRENECはチリ国内に拡大しつつあり、エクワドルでの活動も軌道に乗っています。今後も現地医師やスタッフと協力しながら、私がこれまで蓄積してきた知識や技術が確かな足跡となり、また東京医科歯科大学におけるグローバルズムの一助となるよう尽力する所存でありますので、宜しくお願い申し上げます。

簡単ではありますが、自己紹介を兼ね着任の御挨拶とさせていただきます。

Hasta Pronto.

椿 昌裕 東京医科歯科大学チリ拠点特任教授

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

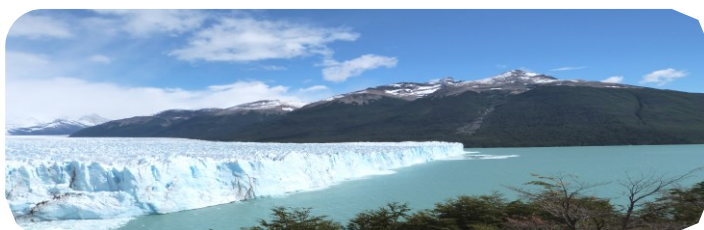
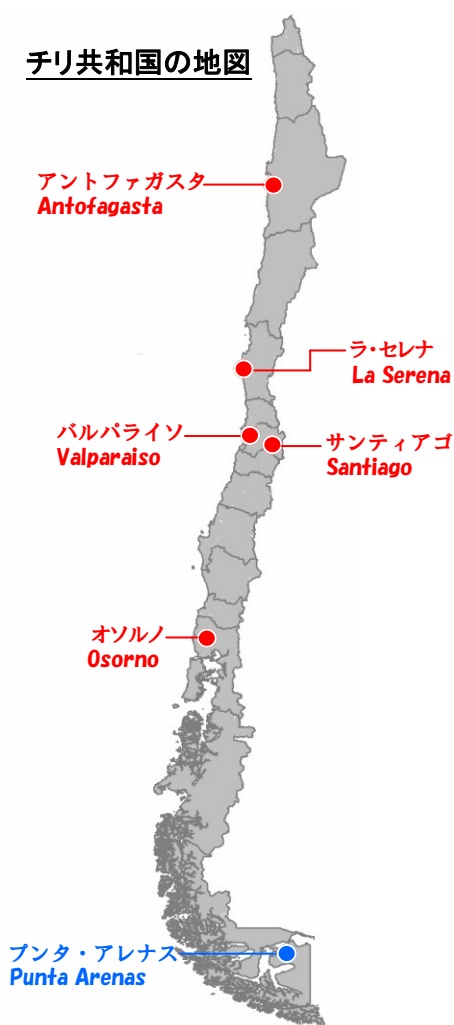
ご挨拶	1
PRENECの進捗状況	2
Staff	
(小田柿助教)	4
プロジェクトセメスター	5
学生チリ滞在記	6
LACRC活動報告	9

PRENECの進捗状況

LACRCのメインミッションである大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。このプロジェクトでは、現在第5州バルパライソ、第12州プンタ・アレナス、首都州サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を用いた検診プログラムが進行中です。また第4州ラ・セレナ(コキンボ)、第10州オソルノにおいても近く検診が開始される予定です。

プンタ・アレナス出張

チリ共和国の地図



第12州のプンタ・アレナスは疫学的に大腸癌の発生率が高いため、予防に対する意識も高い地域の一つです。基幹病院であるマガジャネス病院ではPRENECの第一陣として2012年5月より活動が開始されました。LACRCからも積極的にスタッフを派遣しサポートを続けて参りました。その結果、大腸癌の早期発見や内視鏡切除においてこれまでも良好な成績を残しております。

今回は2014年11月にLACRCから椿教授、岡田助教が同院に出張し、大腸内視鏡検査の指導や実演を行いました。

今後も引き続き現地病院との協力を続けていく予定です。



内視鏡検査を行う岡田助教

サン・パブロ・コキンボ病院病理医の研修を実施

第4州ラ・セレナ市およびコキンボ市は、サンティアゴから飛行機で北へ1時間ほどの海岸沿いに位置するいわゆる双子都市で、両市併せて人口約40万を擁するグレーター・ラ・セレナと呼ばれる都市圏を形成しています。両市は本年1月にPRENECへの参加を正式に表明し、CLCおよび本学との間で協定を締結しました。PRENECの拠点病院となる予定の公立サン・パブロ・コキンボ病院では、現在PRENEC開始に向け各部門において準備が進められています。病理部門ではマダリアガ病理部長が病理検体の日本式取り扱いや病理診断基準などを学ぶため、10月20日～24日の5日間にわたり、CLCのLACRCオフィスにて研修を行いました。研修では、河内講師が大腸・胃・食道早期病変の病理を中心にレクチャーを行い、実際のPRENEC症例を顕微鏡で観察しながら診断基準について討論を行いました。1週間のマンツーマン研修であり、マダリアガ医師も大いに収穫があったと満足していました。

このような研修は、LACRC赴任病理医の重要なミッションになり得ると考えますが、現在のところ残念ながら1年に1人程度しか希望者が現れません。今後プロジェクトの進展と共に、このような機会が増加することを願います。



研修終了後、マダリアガ医師(写真:左)との記念撮影

サン・ボルハ病院での大腸内視鏡トレーニング

チリ国内の大腸内視鏡検査施行医師を増員するため、2013年10月よりサンティアゴ、サン・ボルハ病院にある日智消化器病研究所で大腸内視鏡トレーニングコースが開設され、LACRCの医師が中心となって指導を行っております。

今季はサン・ボルハ病院外科よりゴンサロ・ロス医師が本コースに参加され、3か月に渡って大腸内視鏡の安全な挿入法や病変の発見、内視鏡治療に関する指導を受けました。

今後もPRENECにおける内視鏡医不足を解消すべく、LACRCスタッフが積極的な協力と提言を行い、更に高度で効率的なトレーニングプログラムの遂行に励んで参ります。



研修中のロス医師(中央)と、指導に当たる樫教授、岡田助教

Staff

内視鏡部門に新たに2名のスタッフが加わりました。2014年9月に、椿昌裕教授、11月に小田柿智之助教がLACRCに着任いたしました。PRENECでの大腸内視鏡検査を中心に活動をして参ります。

着任挨拶

小田柿 智之 LACRC 消化器病態学分野

2014年11月20日より、東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点(LACRC)に内視鏡医として着任いたしました、小田柿智之と申します。私は、2003年に東京医科歯科大学を卒業後、消化管内視鏡検査研修のため、国立がん研究センターの消化管内視鏡科に所属し、内視鏡診断・治療に従事しておりました。

消化管内視鏡の分野において日本は世界の最先端を走っており、私がこれまでに経験してきたことや身に着けた知識・技術を私にとっては未知の地である南米に広めることができる可能性がある本プロジェクトに多大な意義を感じ、参加させて頂いた次第であります。

そういった理想を持って赴任いたしました。着任後1ヶ月程度の現在では内視鏡自体のみならず、治療に要する周辺機材機種の相違や不足、スペイン語での意思疎通の問題などが障害となりなかなか一筋縄ではいかないと実感しております。

一方で、私が主に指導に当たるサンボルハ病院で内視鏡的粘膜剥離術:ESD実践の可能性が出てきたり、CLCでの研究会の発表後に他施設の内視鏡治療に対して意見を求められたりと、少しずつですが自分の経験が活かされているという実感もあります。

前任の先生方の御尽力のお陰で大腸癌検診の症例の蓄積が順調に進む中、内視鏡治療の指導・普及にも貢献できればと思っております。

実際に現地でないと分からない状況や問題点などを少しずつ乗り越え、本プロジェクトがより良い状況に進むよう努力していきたいと思っております。今後とも宜しくお願い申し上げます。



小田柿助教(LACRCオフィスにて)



CLCにおける学会にてプレゼンテーションをする小田柿助教

プロジェクトセメスター

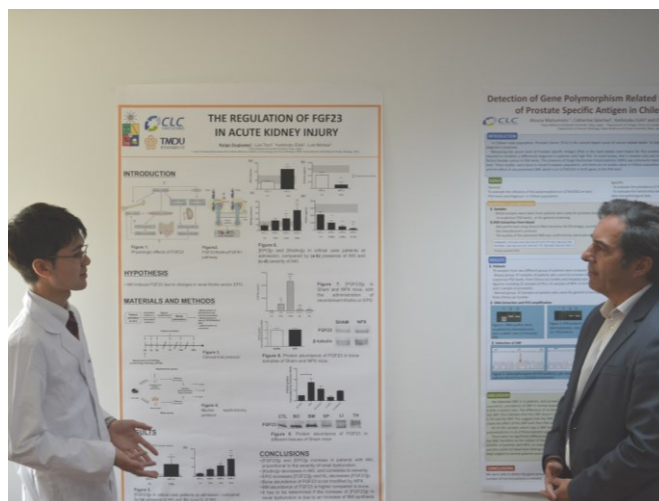
派遣学生の最終研究発表会を開催

本学医学科4年次の学生を対象とした基礎研究体験プログラム「プロジェクトセメスター」では、毎年チリに4～6名の学生を派遣しています。本年も、6月9日から11月15日までの約5ヶ月間、6名の学生がチリに滞在しました。6名のうち、3名はチリ大学医学部の研究室に、3名はCLCの研究室に配属され、指導教官であるチリ人研究者のもとで研究活動に従事しました。

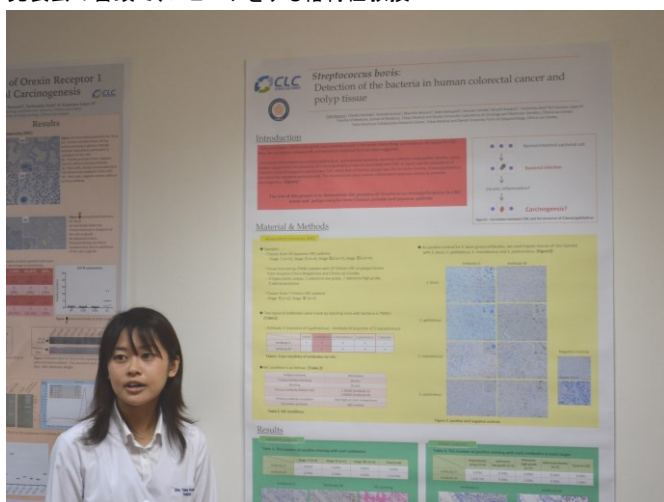
研究テーマは配属研究室により様々で、また研究室の規模、指導体制、設備等も異なるなか、本年度の派遣学生達は皆、与えられた環境の中で最善を尽くして研究に取り組んだようです。短期間の研究体験というプログラムである以上、当然ながら満足の結果が得られた学生もいれば、期待通りに研究が進まず苦戦した学生もいましたが、そのいずれも学生達にとっては将来の糧となる大変貴重な経験であったに違いありません。また、研究体験のみならず、スペイン語を母国語とするラテンアメリカでの日常生活、チリ人との交流、ラテンアメリカの大自然や歴史・文化に触れること、そのどれもが刺激的な経験であったであろうと思います。LACRCでは期間中、定期的に研究進捗ミーティングを開催し、彼らの研究が順調に進むようサポートを行って参りました。10月23日には最終発表会が行われました。帰国後に本学で行われる実際のポスター発表会を模した形式で、各学生とも入念に準備し発表に臨みました。指導教官らからの質問等にも的確に堂々と答える学生達の姿を見て、大変嬉しく思いました。学生達は11月15日に帰国の途につきましたが、この貴重な経験を活かし、彼らが将来国際的に活躍する人材に成長してくれることを願います。



発表会の冒頭で、スピーチをする樫特任教授



オライアン教授と討論する杉澤啓吾さん



プレゼンテーションをする笠野由佳さん



最終発表会后、CLCにて指導教官らと記念撮影

プロジェクトセメスター学生チリ滞在記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣しており、LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。本年度も6月9日に6名の学生がチリに到着し、うち3名がCLC、3名がチリ大学の研究室に所属しました。本号では、チリ大学の研究室にて研究する派遣学生のチリ滞在記をお届けいたします。

チリでの経験

杉澤啓吾 チリ大学医学部統合生理学研究室所属

プロジェクトセメスター期間中チリ大学に派遣して頂いた杉澤啓吾と申します。この場をお借りして私のチリ滞在記を書かせて頂きます。

まず研究について紹介します。私はミチエア教授の統合生理学教室に所属し、腎障害と関連するタンパク質FGF23について研究を行いました。指導教員のトロ先生からは基本的な知識や手技を教わったほか、実験計画の相談を行いました。トロ先生は非常に英語の堪能な方であり、とても速いスピードで話されます。最初は先生の言葉を聞き取ることに必死でしたが、徐々に会話のペースに慣れ、こちらから積極的に発言もできるようになりました。説明を受けたときは理解できたことを反応によって示したり、疑問を持ったらずぐに質問したりすることが大切だと感じました。

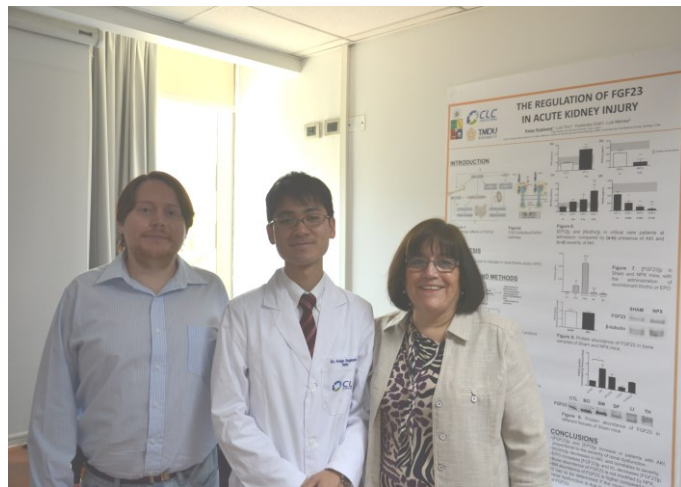
また、教授のミチエア先生からは様々な助言を頂いていました。私がトロ先生と共に教授に報告や相談をしに行くこともありますが、教授は普段から研究室の様子を見て回り、「やあ、研究はどう？」と私を含めた研究室のメンバーを気遣って下さいました。また、研究室の方々には機械の操作や実験の注意点などを私に親切に教えて下さっただけでなく、気さくに話しかけて下さいました。充実した環境で研究に打ち込むことができ、非常に感謝しています。



研究室メンバーの方々

次にチリでの滞在中に感じたことについて書きます。日本とチリの文化には様々な違いがありますが、多くの場合日本とチリのどち

らが良いとはっきり言えるものではなく、違いを知ること自体がとても興味深いと私は考えています。自分では予想もしなかったことを知ったり経験したりすることは何度もありました。そうした体験が、無意識のうちに凝り固まっていた自分の頭をほぐしてくれたように思います。異文化の中に身を置くと、よく言われる「郷に入りては郷に



最終発表会后、研究室メンバーのトロ医師、ゴンザレス医師と

従え」はやはり重要な教訓でした。ただし、グローバル化が進む現代では、「郷」の側の人間にも異文化を受容する姿勢が必要となるのではないのでしょうか。日本に戻り「郷」の側になってもチリでの経験を忘れず、興味を持って異文化を受け入れる心構えを持ち続けたいと強く思いました。

最後に、私の留学を可能にして下さった江石教授をはじめTMDUとチリ大学の教職員の方々とLACRCの皆様には厚く御礼申し上げます。多くの方々のご支援により、研究とチリでの滞在を実りあるものにする事ができました。ありがとうございました。



研究員の方が描いて下さった私のイラスト

5ヶ月半のチリ滞在を 終えて

佐々木愛 チリ大学医学部微生物学研究所所属

2014年度プロジェクトセメスターにおきまして5ヶ月半チリに派遣させていただきました医学科4年の佐々木愛と申します。帰国してからあっという間に1ヶ月が経とうとしております。時の流れるはやすさに焦燥感に駆られる日々です。

このプロジェクトセメスター期間において、私はチリ大学微生物学分野の小児感染を専門とする研究室において、無症候児におけるピロリ菌の感染に関する研究に携わりました。当初はもっといろいろな実験に手を出せたらと思っていました。しかしながら小さなテーマであっても自分で計画を立てて結果を出してまとめる、というところまで仕上げるのは意外と時間も労力も必要なであることが実感でき、機械の数の問題や治安の関係で活動時間も制限される関係上、現実的には最初考えていたほど楽に全てを進めることは難しかったです。研究室の雰囲気は和気あいあいとしていて、英語を話せる方々がほとんどという恵まれた環境でしたので日常の意思疎通にはさほど苦しまずに済んだのではないかと思います。

チリ人はどのような国民か、と問われるとまず頭に浮かぶのは「情に篤い、親切」ということです。サンティアゴ市内の公共交通機関を使っていると、老人や妊婦、幼子を連れた人、障害者、怪我人など、弱者ともいえる立場にある人々に対して積極的に席を譲る人々の姿を頻りに目にしました。小さい時からこのような環境で過ごしているからなのか、素敵な習慣だと思いました。このようなプラスの面がある一方で、特にプライベートにおいて時間に寛容すぎる点などのマイナスな面があるのも事実です。教授とお話していた時に話にのぼったのは、チリでは色々な分野・資格の名前の後ろに“engineering”をつけたがるという形式主義や、肩書きだけで実際の能力が伴っていない資格などもあり、プロフェッショナルリズムに対する意識が低いことも国の抱える問題だということでした。

スペインの植民地であったチリの公用語はもちろんスペイン語。新しく言語を学ぶのはやはり大変で、幼い頃の学習能力があったら、と何度思ったかわかりません。期待していたほどには話せるようにはなりませんでしたが、英語や第2外国語で選択していたフランス語と文法や単語などを比較すると、その共通点や相違点が見えて興味深かったです。今後も細々とでもよいので勉強できたらと思います。

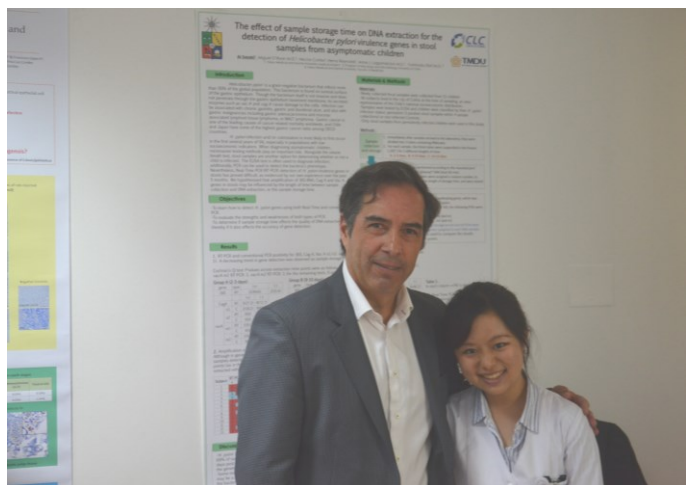
最後になりましたがこの場をお借りいたしまして、派遣に際し多大なるご尽力いただきました人体病理学分野の江石教授、チリにて公私共に大変お世話になりました河内先生、小林先生、JaimeさんをはじめとするLACRCスタッフの皆様、CLC・チリ大学の先生方、その他お力添えいただきました全ての方に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



研究室メンバーとの昼食会にて



Los Dominicosにある民芸市場にて



O'Ryan担当教官と

チリ留学を振り返って

宮岡双葉 チリ大学医学部男性病学研究室所属

こんにちは、チリ大学医学部・男性病学研究室に配属した、医学科4年宮岡双葉です。今回は私が参加させて頂いた研究と学会についてご報告したいと思います。

まず研究についてですが、私は「前立腺がん幹細胞のStemness遺伝子をノックダウンさせた際の、抗がん剤へのアポトーシス感受性はどのように変化するか」というテーマのもと、免疫染色やウェスタンブロットを用いて研究しました。

私が医科歯科大学からの受け入れ学生第1号ということで、研究室の方々は、研究面のサポートは勿論、普段からお昼を一緒に食べたり、誕生日を祝ってくれたり、私のチリ生活が楽しくなるようにと多大な配慮をしてくださりました。また実験の合間には日本の文化やサブカルチャーの話を興味津々で聴いてくれたり、東日本大震災のことを心配してくれたり、日本への強い関心が伺えました。

9月には、チリ南部にあるバルディビアで開催されたリプロダクションに関する学会に研究室で参加してきました。リプロダクションということで、必ずしも前立腺がんがメインテーマではなかったのですが、様々な方々のプレゼンテーションやポスターを見ることができました。研究室の方もポスターを出展していたので、ポスターをまとめる際のポイント等も教えてもらったりしました。

また、学会の合間にバルディビアの観光もできました。バルディビアはチリ人曰く「チリで最も美しい街」と評されるのですが、確かに大きな河川を有し、緑豊かな土地でした。バルディビアにはアウストラル大学キャンパスがあるのですが、この大学の植物園は非常に有名でした。川が流れ、木が生え、美しく苔むした植物園が素晴らしかったです。学生が思い思いにリラックスして勉強していたり、談笑をしており、日本の大学ではなかなか味わえない雰囲気でした。大気汚染に悩む首都サンティアゴとは全く異なる美しい自然を堪能でき、国土が南北に長い故のチリ国内の気候・自然の違いが実感されました。

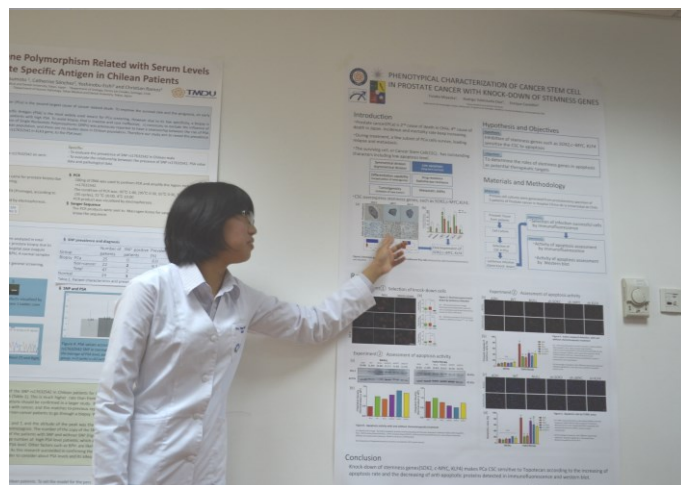
最後になりますが、この素晴らしい留学の機会を与えてくださった江石教授をはじめとする医科歯科大学の関係者の皆様、チリでの生活を支えてくださった河内先生やJaimeさん、私を受け入れてくださったチリ大学の先生方、すべての皆様に感謝申し上げます。



研究室の方の家でのホームパーティー



アウストラル大学の中の植物園の様子



プレゼンテーションの様子

LACRC活動報告

本学名誉・特任教授の水澤英洋先生が チリをご訪問

現国立精神・神経医療研究センター病院長、本学名誉・特任教授の水澤英洋先生が、第69回チリ神経・精神・脳神経外科学会でご講演されるため、2014年10月7日から10月13日にチリをご訪問されました。10月11日にはサンティアゴでLACRCスタッフとご面会され、スタッフからチリ拠点の現状と展望をお伝えし、水澤教授からは激励のお言葉を頂戴しました。

2015年には第22回世界神経学会がサンティアゴで催され、更に2017年に日本で開催される第23回世界神経学会では水澤教授が会長を務められる予定です。神経内科領域でも日本とチリとの友好関係が発展することが期待されます。



LACRCオフィスにて(右:水澤英洋教授、左:椿昌裕教授)

本学腎泌尿器外科より、藤井准教授、伊藤助教が チリをご訪問

9月28日から10月3日、本学腎泌尿器外科より藤井靖久准教授、伊藤将也助教が、CLC泌尿器科ラモス医師のご招待によりチリをご訪問されました。CLCおよびチリ大学では手術や病棟、カンファレンス等をご見学されました。藤井先生は本学腎泌尿器外科で独自に開発されたロボサージャン・ガスレス・シングルポート手術に関する講演を各施設で行い、低侵襲、炭酸ガス不使用などの観点からチリ人医師達より高い関心を集めました。

また、同時期にプロジェクトセメスターを通じてCLC泌尿器科に派遣されていた本学医学科4年生、松本惇奈さんの研究状況や発表も視察されました。



CLCで講演を行う藤井靖久准教授

慶應義塾大学によるLACRC・CLC視察

本学チリ拠点には2010年に設置され、現在までに計8名の職員（医師・研究者）が赴任し勤務してきました。本学の海外拠点活動はニュースレター等で対外的に広くアピールされ、本邦においては大学のグローバル展開の1モデルとして高い評価を受けております。

我が国の現政権の方針と相まって、大学のグローバル化が重視される中、海外拠点設置に積極的な大学が増えており、本学の海外拠点活動は益々注目されているようです。この度、慶應義塾大学より、川田孝征氏、高嶺幸子氏、田中英雅氏の3名が来智され、CLCおよびLACRCオフィスの見学や、海外拠点運営に関する意見交換をLACRCスタッフと共に行いました。LACRC開設当初に苦労した点や、拠点運営のメリット・デメリット、理想とすべき人員体制などについて、現場ならではの忌憚りの無い意見交換が行われました。

今後は本邦の大学・研究機関がセクショナリズムに別れを告げ、協力し合い、効率的なグローバル展開を実現することが必要となるでしょう。まだ4年あまりとはいえ、本学拠点活動において蓄積された経験が後続の成功に寄与することを願います。



プレゼンテーションをする河内講師



ミーティングが終了後、慶応大学の方々とともに記念撮影

編集後記

ついに大晦日ですね。サンティアゴ・東京間の時差は12時間ですが、毎年12月31日には、世界のどこにいても時を同じくした祝典が開かれます。チリではこの時期になると、都市で暮らしている人々が田舎に帰り、普段は離れて住んでいる家族が一堂に集まり、それからパーティーを催し、ダンスをしながら楽しい時間を過ごすのが最も一般的な習慣です。今後もLACRCスタッフの活動及びPRENECの進捗状況を本Newsletterを通じて、ご報告してまいります。（ウレホラ・ハイメ）

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 16, December 2014

[発行日] 2014年12月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: jurrejola@clc.cl